

福島大学行政政策学類同窓会

阿武隈会報

第29号

発行年月日	令和5年9月1日
発行所	福島大学行政政策学類同窓会阿武隈会 〒960-1296 福島市金谷川1番地
発行人	小林 孝
編集者	堀江 正樹・須藤 達也 工藤 真之・加藤 千里
題字	大谷 明夫 (初代行政社会学部長)

「行社愛・行政愛」

阿武隈会長

小林 孝



会員の皆様におかれましては、日頃より阿武隈会の活動にご協力いただき、心より感謝申し上げます。

ここ数年、コロナ禍、頻発する自然災害、物価高騰等、会員の皆様を取り巻く環境は非常に厳しいものがありますが、行政社会学部・行政政策学類で培われたものを生かし、様々な分野でご活躍のことと思います。

令和2年から私たちの生活に大きな影響を与えてきた新型コロナウイルス感染症は、5類移行により、ようやく先が見通せる状況となり、様々な社会・経済活動がコロナ禍前に戻りつつあります。阿武隈会においても、今年度、福島総会・懇親会を4年ぶりに10月に開催する予定であり、同窓生の皆様の交流を図るべく、多くの方々にご出席いただければ幸いです。

私たちは、大学はもとより何らかの組織や地域に縁があります。何らかの縁で出会った学校、組織、仲間、現に自分が所属している組織や仲間を愛せる人ほど、これから出会うであろう組織や人間を愛せるのではないかと考えます。逆に、「今の職場や職場の人間は嫌いだけど、これから行く職場やその人間は好きになれる。」と言う人がいるとすれば、その人に対して疑念が生じるのではないのでしょうか。どの出会いが自分の一生を左右するかはその時は分かりません。よってそういう意味で、その場その場で所属に愛着を持ち、一つ一つの出会いを大切にしなければならないと感じます。

私自身、学生時代、大学に愛着があったのかという自信はありませんが、今となって考えると、学びやスキル、人との出会いを与えてくれたのが福島大学行政であり、感謝し愛着を持ちながら日々過ごしております。

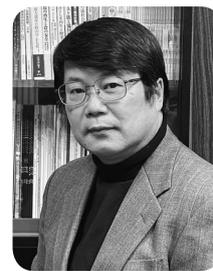
行社愛、行政愛を持ちながら、行政社会学部誕生以来から連綿と続く、様々な伝統を見守りながら、今まで築かれてきたものを大切に、同窓生にとっても、また母校にとっても、阿武隈会が必要な存在となるよう、会を発展させていかなければならないと改めて感じた所存ですので、同窓生の皆様におかれましては、阿武隈会の活動に関心を持っていただき、関わっていただけますよう心からお願い申し上げます。

結びに、福島大学行政政策学類の更なる発展を祈念するとともに、会員の皆様のますますのご健勝をお祈り申し上げ、あいさつとさせていただきます。

ごあいさつと
学類の現況

行政政策学類長

高橋 準



4月より新たに行政政策学類長に就任した高橋と申します。「阿武隈会」の皆さまには日頃より学類の研究、教育、地域連携等にご協力いただき、誠にありがとうございます。

今年度の学類入学者は昼夜あわせて215名、編入学での入学者12名、大学院地域デザイン科学研究科地域政策科学専攻の入学者は5名でした。コロナ禍の厳しい情勢の中でしたが、例年通り新たな学類・専攻の構成員を迎え入れることができました。5月より区分が五類に変わりましたが、大学ではまだ教室に人数制限を設け、一部の講義は遠隔での実施となっています。後期はより平常時近くに戻す予定でありますが、まだ十分な注意が必要かと思っています。

ところで、既にかきました通り、大学院の改組で、これまで「地域政策科学研究科」といっていた、行政政策学類が基礎となっている大学院は、より大きな「地域デザイン科学研究科」の一専攻となりました。計画の詳細は前年度の会報で福島評議員から説明があった通りです。もっとも、大学院の内容や精神が変わったわけではなく、個別の学問分野での研究を深めつつ、地域課題に応えるという大本はそのままです。

ただし、全学再編の動きは大学院にとどまるものではなく、「次は学類の改革」と言われております。どういう形になるかは、このごあいさつを書いている時点ではまだ判然としておりません。しかし今後どのような形になるとしても、行政社会学部、行政政策学類と続いてきた35年の歩みでつかんできた成果を手放すつもりはありません。

なお「35年」という小さな節目を迎える今年、学類スタッフによる『大学的福島ガイド』（昭和堂、2024年刊行予定）の共同執筆が進みつつあります。こちらは「阿武隈会」のご支援を受けつつ、刊行の際には会員の皆さまにもお手に取っていただきやすい形にできればと思っております。まだ少し先の話ですが、ご記憶の片隅においていただければ幸いです。

今後とも厚いご支援のほど、よろしくお願いいたします。

「技術革新と大学教育の幸せな関係」

行政政策学類評議員 福島 雄一

行政政策学類の評議員をしております福島雄一と申します。評議員2期目となり今年度は通算4年目になります。こちらに投稿するのも4回目です。阿武隈会の皆様、今年度もどうぞよろしくお願いいたします。

令和5年5月に政府により行われた新型コロナウイルス感染症の5類への感染症法上の位置づけの変更により、長く続いたコロナ禍も収束の方向に向かいつつあり、本学も平常化の過程にあります。この夏の集中講義から、コロナ禍で令和2年度から始まった教室の収容数を半減する教室収容制限が解除されます。これで見慣れた対面の授業風景が復活します。ただ、現状では散発的にコロナ感染が未だ発生しており、これまでの行動上の注意や体調管理はもちろん必要です。

これから本格的にコロナ禍前の大学に戻るに当たり、様々な課題があります。例えば、コロナ禍前に行われていた学内の様々なイベントや授業を、以前と同じように実施出来るのかという懸念です。コロナ禍の数年間それまでの経験が途切れてしまっている状況下で、以前と同じものを再現するのか、いっそやり方を変えるのかという選択です。行政政策学類で伝統的に行われてきた新入生合宿ガイダンスは中止となり、代わりに学内で入学式前からガイダンスやイベントを行うなどして、学内で行う形で再編されています。つい先日7月16日の日曜日には、対面でオープンキャンパスが行われましたが、以前のように2000人以上の来場者に恵まれ久しぶりに賑やかな風景が校内に戻りました。これまでコロナ禍で行われてきたオンライン授業についても、対面授業を原則としつつ、教育効果を見据えながらオンライン授業も残すという整理になりました。本学類ではシニターやライフサポーターなどの学生団体の支援や協力によって学内イベントが維持されている部分も大きく、コロナ禍による学生のイベントの経験の断絶は、いま現在学内の行事の運営に大きな影響を与え、運営方法の再考を促しています。

さて、いま現在、令和5年度前期授業も終わりに近

づき、夏休み前の正規試験が目前ですが、最近大学の授業に関して急速に話題になったものに生成AIの利用問題があります。チャットGPT等の生成AIが世間を賑わせ、私の周りでも利用を始めている学生はいます。個人的にはこのようなデジタル技術が大好きなものでワクワクしますが、どうもいろいろと問題がありそうです。ここで、本学で夏休みを前に学生向けに発出された注意喚起の通知をちょっと長いですが、抜粋引用します。「生成AIの利用に関する注意喚起」(2023年6月5日)という文章です。

「対話型人工知能(AI)『チャットGPT』などの生成AIの技術がめざましく進展しており、大学を含む学校教育の場でどのように対応していくかが問われています。新しい技術を身につけて積極的に活用することは大事なことですし、福島大学でもすでに扱っている授業もあり、大学のカリキュラムの中でどのように扱うかについては今後、議論していく必要があります。」「授業担当者に生成AIを使用してレポートを作成するように指示された場合を除き、生成AIにより作成したレポートを提出することは、剽窃に当たりますので不正行為となり、単位を修得できなくなる可能性があります。そもそも、現在の生成AIの技術では、間違った情報が出力される可能性があるわけですが、問題とされるべきはその点ではありません。剽窃、つまり他人の文章を写すこと自体が倫理上問題のある行為です。また『解のない問いにチャレンジする学生を育成する』ことを目標としている福島大学の学生として、さまざまな試行錯誤を重ねながら自分なりの『解』を探究していくことこそが求められるのであり、安易に生成AIにレポートを作成させる行為は決して望ましいものではないと言えます。新しい技術を否定するのではなく、積極的に学んでほしいと思いますが、レポート作成や課題提出に向けて、以上のことに留意してください。」

このほかにも生成型AIについては様々な行政機関や団体から意見表明がなされています。例えば、「生成



AIの利活用に関する国立大学協会会長コメント」(令和5年5月)は、新しい知見や技術の出現が、社会変革の一助となり、大学での生成AIの利活用に積極的な意見を述べつつも、生成AIの欠点や社会で利活用するルールの不在などの課題を指摘しています。また、就活の際のエントリーシートの作成に生成AIが利用されると正しい人物評価が出来ないという企業の懸念が報道されていました。将来有望な技術ですが、現在の完成度では問題も多いという認識のようです。

さて、ここで昔話を少しさせてください。私が大学院生だった30年以上前の話ですが、修士論文を書くためにいわゆるワープロというものを20万円以上出して購入しました。ワープロは、入力用のキーボードと大きなディスプレイとプリンタを備えた文書作成の専用機です。ただこの時代はまだ論文作成は手書きの人も多く、とても大変でした。そして、ワープロ購入組は急速に増え、何よりも良かった点は、修正は簡単なので提出期限ギリギリまで論文を書くことが出来たことです。続いて30歳になる頃に、私は本学の行政社会学部に講師として採用されました。赴任して驚いたのは、すでにインターネットが導入されていたことです。当時の都内の大手の私立大学でもみることはありませんでした。ただ、導入初期には今でいうブラウザがありませんでしたので、ホームページはもちろん存在せず、最初はファイル交換しかできませんでした。ですからアメリカの大学の論文や資料をダウンロードして楽しんでいました。当時の国立大学は、将来有望な技

術であるけれども、コストがかかり、利用法もまだきちんとしていない技術をあえて引き受けて世間に広める手伝いをするという余裕がありました。その後のインターネットの発展は皆さんご存じの通りです。

ワープロもインターネットも、完成度を増して今では研究や生活になくしてはならないものになりました。生成AIも同じもののように感じますが、ただ、チャットGPTを開発した企業の経営陣やAIの専門家は、社会のルール形成が必要だという危機感を明らかにしています。エクセルのシートを自動で埋めてくれるというような事務的な便利さを超えて、人間の思考や活動の領域に踏み込む技術だと懸念しているようです。これまでの技術のような単純な作業から人間を解放する効率化というレベルを超えて、人間の代わりに知的な作業をこなしてくれるAIが登場すると、人間は労働からも解放されるかもしれません。そのような世の中は、人間にとってユートピアなのかディストピアなのか。労働がない世界では人間はなにをするのでしょうか。また、つい最近まで世界を制覇していたIT企業の序列が、AIによって吹き飛んでしまうという技術進歩の早さと企業の栄華盛衰にも驚かされます。

このような科学技術の進歩が社会や大学や学問の世界をどのように変えていくのかということは、人間の本質を考える、人間とは何かという哲学的課題に常にぶつかりますが、若い学生諸君は上手にこの波を乗りこなし、何十年か後には、チャットGPTが登場したときにはねえ、と昔話をしているかもしれません。



追悼 加藤眞義先生を偲んで

10期生
松田聡一郎



加藤先生の思い出

私が加藤先生と初めてお話ししたのは、学部で2年生の頃だったと記憶しています。私は行政学科でしたが、当時先生が担当していた応用社会学科の社会学原論に興味を持ち、ぜひとも加藤ゼミに進みたいと思い、お声がけしました。所狭しと本が積まれた研究室の中を行き来しながら、にこやかにドリップ・コーヒーを淹れていただいた先生の姿を思い出します。

本ゼミでは主に、理論社会学の輪読を行っていました。特にジンメルの『社会学』に取り組んだ際は、訳文の難しさもあって遅々として輪読が進まない日がしばらく続きました。そんな状態をゼミでは「ジンめる」と表現し、「今日はことのほかジンめるね」と加藤先生も苦笑いをされていたことを思い出します。

私は卒業後、ゼミの後輩と結婚しましたが、その結婚式にも先生はおいでくださいました。私たち二人に暖かいエールを送っていただいたことを昨日のように感じます。その後も年に数回はお電話を下さり、いつも1時間以上にわたって日本の社会情勢などについて熱くご教示くださいました。東日本大震災後は、復興に関する社会学的考察に力を入れられていたようです。私自身も東日本大震災の被災者支援の仕事をしたこともあり、卒業後約20年を経た令和元年に、大学院生として再び先生の門を叩くことになりました。

大学院では私の興味関心にとことん付き合ってくださいました。先生の専門外の質問も多かったと思いますが、いつも優しい語り口で誠意をもって答えて下さいました。先生に最後にお会いしたのは、お亡くなりになる1週間くらい前でした。体調が思わしくないようで、「まずは体を良くしなきゃね」とおっしゃっていました。歩くことが辛いようで、福島駅まで車で送りました。その際に見た後ろ姿が先生との最後のお別れになりました。急なお別れに、まだ気持ちは十分に整理できていませんが、四半世紀にわたる先生のご薫陶があって、今の私がここにいます。加藤先生ありがとうございました。心よりご冥福をお祈りいたします。

長かったコロナ禍の 生活を越えて

令和5年度 学友会学生会部会 執行委員長 2年
米倉 輝

去る2023年5月8日、全国的に新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことでその日から大学生活がコロナ禍以前の水準に戻った…というわけにはいかず、それでも段階を踏んで確実に以前の状態が戻り始めているということは今現在実感しているところでございます。私が入学したころは、各講義棟は座席間隔をあけて配置されていたり、講義自体が対面ではなくYouTube上に投稿された動画をみて課題に取り組むという遠隔形式で行われたり、学食の座席がすべて同じ方向に向くように(対面で座ることが出来ないように)設置されていたりとコロナの影響をとことん受けた生活だったと記憶しています。

しかし前述したとおり今年度は少しずつその規制が緩和され始め以前の状態に戻りつつあるのが現状です。5類移行後から学食の座席は一部対面着席が可能となり、今年度開講している講義に関しては昨年度よりも対面で行われている講義が多くなっています。また、今夏の集中講義からは各講義棟の座席間隔の間引きが撤廃され最大収容人数の限界まで入室することが可能になる、ということが教務課の通達で分かっています。校内を歩いてもマスクを外して生活している人が徐々に増え始めており、全国的に見ても大学内で見てもコロナ禍以前の生活に戻り始めているのは明らかです。

学友会としてもこれまでは規制により完全な状態で行うことが出来なかった企画も規制撤廃を受け完全な形で、更に前向きで楽しい活動を行うべく尽力していきたいと考えていますので、これからもサポートのほどよろしくお願いいたします。



● 会員からの近況報告 ●

ベトナムと出会って

18期生
水林 舞子

福島大学を卒業した2009年、ベトナムへ単身移住をした。在学中、内閣府国際交流事業「東南アジア青年の船」に参加したことがきっかけで、一番勢いを感じたベトナムへ行こうと決意した。ベトナムでは日系旅行会社に就職した。その後、東京本社に改めて入社し、学校や旅行会社にベトナム修学旅行の魅力伝える仕事もしている。当時、私が在籍していたホーチミン支店の社員の7割以上はベトナム人だった。昼は女性社員たちが各自おかずをいっぱいに入れたタッパーを持ち寄り、みんなで分け合って食べていた。ほとんどが子育て中のママさんたちだった。臨月間近のベトナム人女性スタッフは、退社すると会社前にバイクで旦那さんが迎えに来ており、よいしょと、後ろに腰掛けてバイクで颯爽と帰宅していった。ベトナムは女性が強く、働き者である。年2回、女性の日(国際婦人デーとベトナム女性の日)には会社の女性たちにはバラが手渡され、お小遣い程度の金額ではあるが、お金が包まれて渡されたこともある。道路沿いには臨時の花の売り子さんたちがバラを売って、バイクで立ち止まった男性たちが恋人や妻のために買っていく姿も目にした。社員旅行や忘年会にも家族を同伴することも珍しくない。社員の子どものために、大道芸人など呼んでは出し物などで子どもたちを喜ばせてくれる。そんな光景を目にした日から月日は流れ、私も結婚し、一児の母になった。(最近の日本の「ライフワークバランス」という言葉を聞くと、当時の私はなんと恵まれた環境にいたのだろうと思わずにいられない。)

当時は友人の大家族の家に居候した。外国人である私を本当の娘のように接してくれたおかあさんやおとうさんは14年経った今でも大切な家族である。今、日本には約48万人のベトナム人が暮らしている。私がそうであったように、彼らがこの国で大切な友人や家族のような日本人に出会えることを心から願う。



今こそサード プレイスが必要

24期生
岩村 和哉

公務員を目指す同級生が多い中、大学4年生の時の夢は「ゲストハウス(旅人宿)をつくること」だった。在学中の旅の体験がずっと心にあって、国籍も年齢も関係なく境界線を超えて語り合う、ポジティブな雰囲気が心地よかったことを憶えている。家庭でも職場でもない、第3の居場所、それを「サードプレイス」と呼び、そのゲストハウスがそれだった。とはいえ、自分で作るとなると資金や語学力が必要になるという現実と直面し、ご縁があった民間企業に就職した。

就職して3年、やはり夢が諦められない。新卒で入った会社を退職し、2018年7月、仙台にできるゲストハウスの立ち上げスタッフになった。畑違いの宿泊・観光業。世界中からくる旅人を地域と繋げる仕事で、英会話も勉強中、根性で働いた。仕事外の時間でも、お酒片手に夜通し旅人たちとたくさん話をした。旅や人生、恋愛、仕事、仙台や東北の観光など、他愛もない話。この空間は彼らにとっての「サードプレイス」で、何かのきっかけになっていたはずだ、とそう願っている。

ここではパンデミック直前の2020年春まで2年働いた。現在は色々あって動画・WEB制作業で起業し、夫婦で会社を経営している。人が集まる地域振興イベントの運営もしており、常に人との繋がりの重要性を実感している。

2023年夏、マスクを外す人が増えてきた。様々な制限が緩和され、同時に、オンラインで初めましてだった人とも対面で会う機会が増えてきた。

今こそ、私は地域にサードプレイスが必要だと思っている。お茶会、ボランティア活動、カフェ、地域イベント、町内会、趣味の繋がりなど。家庭でも職場でもない第3の居場所に人が集まり、あーだこーだと話し、賑わい、アイデアが膨らみ、やりたいことが見つかるかもしれない。そんな場所がもっと増えたら、人も地域も活性化すると思う。

今の目標は「東北でサードプレイスをつくり地域を盛り上げること」だ。新米起業家、成功するかどうか、答え合わせはまだ先で。



行政政策学類 中里クラス学生が 「標語デザインを提案「エシカル消費」ポスターが県内1,000店舗に掲示

令和 4 年 10 月、行政政策学類スタートアップセミナー I（中里真准教授クラス）では、福島県消費生活課からの依頼を受け、福島県の重点化事業「地球にやさしい消費推進事業」の一環で「エシカル消費」ポスターの制作に協力し、このたびポスターが完成しました。

ポスターは令和 4 年 10 月の食品ロス削減月間にあわせて、県内の主要スーパーやコンビニなど約 1,000 店舗で掲示されています。



行政政策学類 阪本尚文准教授が 「第 5 回インテリジェント・コスモス東北文化奨励賞」を受賞

令和 5 年 5 月、行政政策学類の阪本尚文准教授が組織した共同研究「草創期福島大学経済学部の総合的研究」が、インテリジェント・コスモス学術振興財団「第 5 回インテリジェント・コスモス東北文化奨励賞」を受賞しました。

同賞は、東北が生み出した文化の独自性と先見性を発見または体系化して、内外に発信する優れた研究・活動の実績に対して授与される賞です。

阪本准教授が組織した共同研究の成果『知の梁山泊一草創期福島大学経済学部の研究』（八朔社、2022 年 11 月刊）は、福島大学の複数の学類のスタッフや福島大学経済学部 OB で各分野の第一線で活躍している経済学者らが結集し、20 世紀中葉の福島大学経済学部の学知とその担い手たちを、経済学史・理論経済学・経済史・歴史学・法学の各方面から多面的に考察しています。



行政政策学類 今西一男教授が 「2022 年度都市住宅学会賞・論文賞」を受賞

令和 4 年 11 月、行政政策学類の今西一男教授が公益社団法人都市住宅学会「2022 年度都市住宅学会賞・論文賞」を受賞しました。学会誌『都市住宅学』第 115 号に掲載された論文「小規模区画整理による遊休地再編の現状と課題」が、都市住宅学に顕著な貢献をしたものとして評価されました。

同論文では、昨今増加する都市の遊休地の再編を企図した「小規模区画整理」の特徴と論点を整理し、今後の適用に向けた検討を行っています。空き地・空き家といった都市の遊休地を有効な資源とみなし、その活用の方法を探る基礎研究です。



福島大学「新教育制度 2019」 初の卒業生を輩出

福島大学では、「三位一体の改革（食農学類設置、既存組織見直し、教育改革）」による新しい教育制度を令和元年度から開始し、4 年間の教育活動を経て、令和 5 年 3 月に初の卒業生を輩出しました。

学位記授与式は 3 月 24 日に同大で行われ、5 学類卒業生 943 人と大学院修了生 101 人が卒業の日を迎えました。中でも地域の食料・農業の課題解決に貢献できる人材を育成すべく新設された食農学類では、103 人が初の卒業生となりました。

式典では、三浦学長から各学類卒業生総代に学位記を授与し、「新型コロナウイルス感染拡大など多くの困難に立ち向かった卒業生の経験は、これからの人生の糧になる」と送別の言葉を贈りました。新卒業生の今後の社会での活躍を願っています。



教 員 異 動

日付	職名	氏名	専門講義科目等	異動内容
R4.11.17	教授	加藤 眞義	社会学	死亡退職
R5.4.1	教授	高橋 準	家族社会学	学類長（～ R7.3.31）
R5.4.1	教授	菊地 芳朗	考古学	教育研究評議会評議員（～ R6.3.31）
R5.4.1	教授	佐々木康文	情報社会論	学類長補佐（～ R6.3.31）
R5.4.1	教授	眞歩仁しょうん	英語教育、文学	昇任
R5.8.31	准教授	金 炳学	民事手続法	退職

卒業記念パーティーという伝統の存続

令和4年度 校友会学生部会 執行委員長 3年 畠山 桃子

初めに、令和4年度卒業記念パーティーを開催できたのは、同窓会阿武隈会の皆様、ホテルグリーンパレスの皆様、教職員の皆様、そして本イベントに関わっていただいた全ての方々のおかげです。学生部会を代表しまして、この場をお借りしお申し上げます。

コロナ禍により学内で多くの制限やイベントの中止が余儀なくされておりましたが、今年度は規制緩和の動きが社会的に広まり、卒業記念パーティーを開催すべきか当初から検討していました。しかし、過去に本企画の運営に携わったことのある先輩方が卒業されていたことと、ウィルスが完全に終息しきっていない状況下での大規模な企画が可能なのかという不安があり、中々決断に踏み切れずにいたのです。そのような中、阿武隈会の方から、開催するか否かと、ご協力をいただける旨の連絡をいただきました。ご経験のある阿武隈会の皆様との合同開催、そのことを私たちは非常に心強く感じた記憶がございます。そこで令和4年度卒業記念パーティーの開催を決定しました。私たちの代の目標は、コロナ禍から脱コロナ社会への繋ぎと引継ぎであり、本パーティーは、もちろん福島大学を卒業される先輩方の門出を祝うという大きな目標を前提としておりますが、その他の意識したこととして、

何代も前から行政政策学類の伝統として在り続けたものを風化させてはいけない思いがありました。

同窓会の方々やホテル担当者様、教員部会とどのようにしたら規制を敷きながらも往來のように先輩方に楽しんでいただけるかを常に試行錯誤しつつ、福島県のコロナ対策とイベント開催のガイドラインを参照しながら準備を進めました。しかし、持ち上がった課題は参加者数の検討です。往年の学位授与式後に卒業記念パーティーへ出向くという流れが完全に遮断されていたため、参加者を募る告知を特に重視し、同窓会、教員、学生部会の各方面から開催に関する広告を行っていただきました。その結果、運営を除き62名の方々にご参加いただけました。来年度は現在よりも規制緩和が進むことでさらに多くの方にご参加いただけるよう企画する所存です。

最後に、私たちは、このような伝統に携われたことを誇りに感じております。本企画の関係者の皆様には私の至らない点が多いにも関わらず、多大なるご協力をいただいたことに今一度心から感謝を申し上げますとともに、今年度の学生部会の活動へもご理解、ご協力をお願いしたいと思います。



令和 4 年度会務報告

- 7/16 理事会 (新年度予算・事業方針)
- 11/1 会報第28号発行 (総会書面開催通知)
- ★ 書面開催の総会については11/30までに異議・質問がなかったことから、同日をもって原案どおり可決したものと取り扱いました。
- 2/25 理事会 (年度振り返り、来年度方針検討)
- 3/24 卒業記念パーティー ※学友会と共催

令和 5 年度以降の対面イベントについて

新型コロナウイルスの5類移行を受けて、対面イベントを再開することとしました。

総会・懇親会は別添のチラシでご案内しておりますとおり、福大祭・ホームカミングデーと同日の10/28開催としました。

地域懇親会と東京懇親会は今年度の開催を見送り、来年度以降の再開に向けた検討を継続してまいりますので、ご承知おき願います。

役員名簿

(令和 4 年度改選、任期は令和 6 年度総会まで)

- 会 長：★小林 孝
 副会長：★鈴木 敬 ★小椋純一郎 ★堀江 正樹
 監 事：田中 康治 鈴木 貴士
 理 事：渡邊 弘利 ★加藤 千里 矢内 祐紀
 ★工藤 真之 ★香野 雅之 小林 良平
 若松 麗葉 斉藤 雅洋 高橋あゆみ
 松本 学 高橋 裕樹 須藤 達也
 注) ★は福島大学同窓会 (全学同窓会) 役員を兼務

本会へのお問合わせ

本会へのお問い合わせについては、ホームページの「お問い合わせ」からお願いいたします。



会員情報の修正について

名簿管理委託業者を変更したことにより、会員ご本人による修正は行えなくなりました。

会員情報の修正については、下記QRコードのリンク先フォームよりご連絡ください。

なお、同窓会という性格上、ご本人からの希望であっても「会員名簿からの削除」は行っておらず、「連絡先情報の削除」にて対応致します。

会員情報は本会会報・各種行事案内の送付の目的で使用し、会員名簿を紙や電子媒体として発行・頒布することはありません。ただし理事会での議決に基づいて学内諸団体へ会員情報を提供することがあります。その際は、本会ホームページ等で提供を行った旨を広報する、また情報提供は紙媒体で行うことを原則とします。



会員状況

(令和 5 年 8 月 1 日現在)

<正会員>		<準会員>	
行政社会学部卒業者	4,554名	行政政策学類在学者	702名
行政政策学類卒業者	3,291名	〃 夜間主在学者	72名
現代教養コース卒業者	417名	現代教養コース在学者	0名
学部学類 計	8,262名	学類 計	774名
地域政策科学研究科修了者	208名	地域政策科学研究科在学者	8名
大学院 計	208名	大学院 計	8名
合 計	8,470名	合 計	782名



訃 報

加藤真義教授が令和 4 年 11 月 17 日に急逝されました。(享年 59 歳)

加藤先生は平成 9 年 4 月に福島大学行政社会学部に赴任以来、「社会学 (社会学思想、農山村地域研究)」を中心とした教育研究活動にご活躍されました。心から哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

